

「回り道」構造と物象化

真 田 哲 也

第一節 問題の所在

マルクス経済学批判における価値論の諸規定の理解を巡っては、今なお経済学者の間において基本的な対立がある。たとえば価値の実体規定、「抽象的人間労働に關しては、統一的な理解は生まれていない。この問題はまさに『決定的な跳躍点』であるにもかかわらず……見解の対立が続いているのである」⁽¹⁾。また、価値表現の「回り道」論においても論争のあることは周知の事柄である⁽²⁾。これらの論点は、マルクス経済学批判の理解の根幹にかかわるがゆえに深刻な意義をもっている。しかし、従来の議論はマルクス価値論の理論的含意が十全に汲み出されないままに、経済学的諸術語の狭い枠内でなされてき

たといえる。その問題を挙げるならば、第一にこれまでマルクスの「回り道」論は、近代における諸個人の存在構造一般の問題としては決して把握されてこなかった。後述するように、「回り道」とは単に商品・貨幣關係における価値表現固有の問題ではなく、ひろく近代的国家と市民社会における諸個人の普遍的転倒のプロブレマティクとして把握されるべきものであり、したがってまた、近代社会特有の機能様式を總括的に特徴づけたものと解されるべきである。このことの理解なしに、価値論における「回り道」の論理も決して解明されえない。第二に、価値概念の諸規定を理解する大前提ともいえる価値のカテゴリー・思考物としての近代的特質がこれまで黙殺されてきた。その結果、価値の実体規定に関し

ては、規定内容それ自体とその分析の方法的被規定性の理解を巡って諸分岐が生じ、また「回り道」構造の理解においては、後述するような抽象物の「回り道」的性格の問題が見過されることで、諸解釈が分立することになったといえる。⁽³⁾このことは、従来の研究において「経済的カテゴリー批判」というマルクスの方法に包蔵されていた、カテゴリー・思考物^{ゼッゲン}の社会的形態性への批判的理解が看過されてきたことと照応している。⁽⁴⁾さらに第三には、以上の点を踏まえつつも『資本論』における価値表現の「回り道」論の理解に際しては、物象化構造の解明が不可欠のものとされねばならないが、従来の議論にはこのような観点が不鮮明であった。『資本論』において叙述されている「回り道」とは、物象化されたところの「回り道」であり、物象化という事態の孕む転倒性を解明することと関連させて把握されねばならない。換言すれば、商品・貨幣における「回り道」構造は重層的な転倒性をもっているものであり、そのような「経済的カテゴリー」における物象的性格を不問に付してなされてきた従来の「回り道」議論は極めて制限されたものであった。全体として「回り道」を巡るこれまでの諸解釈において

は、マルクスがそこに与えた近代市民社会への批判的意義が見落とされていたといえよう。

第二節 近代的諸個人の「回り道」構造

マルクスの「回り道」という規定は単に価値表現という『資本論』解釈の一テーマとしてのみみなされるべきではない。それは、まずなによりも近代における人間の存在構造の問題として捉えられねばならない。「人間は自己自身と矛盾しながら、即ちある抽象的な局限された様式、部分的な様式で、ある障壁を乗り越える事によって、国家という中間項(Medium)をとおして、つまり政治的に自己をその障壁から自由にする。……人間は自己を政治的に自由にする事によって、回り道(Umweg)をして、すなわちたとえ避けられない中間項であろうが、ある中間項をとおして自己を自由にする。……人間は國家の媒介によって自分を無神論者として宣言する場合でさえ、すなわち國家を無神論者と宣言する場合でさえ、なお依然として宗教的にとらわれている。なぜなら、かれはただ回り道によってだけ、ある中間項をとおしてだけ、自分自身を承認しているにすぎないからである。宗

教とはまさにこうした回り道による人間の承認にほかならない。すなわち、ある媒介者 (Mittler) によるのである。国家は人間と人間の自由との媒介者である。ちょうどキリストが人間の持つ神性、宗教的偏執のすべてを人間から負わされている媒介者であるように」(『ユダヤ人問題によせて』MEW Bd. 1, S. 353)。

ここでマルクスが、媒介者ないし中間項を介する諸個人のあり方を特徴づけて「回り道」という規定を用いていることを確認することができる。その際、マルクスは国家の回りの道的性格を指摘するために宗教との類似性を引証しており、マルクスの宗教論がまず問題となる。言い換えれば、『ユダヤ人問題によせて』でマルクスは宗教論を一つの理論的ステップとして近代的国家論を展開しようとしている。まず第一に、マルクスはキリストという媒介者によって共同する諸個人の宗教的あり方を「回り道」として把握する。ここでは、まだ「回り道」規定は単に宗教を一般的に特徴づけたものでしかない。それに対して第二に、近代における宗教の問題は二重に考察される。一方で、近代の政治的国家、民主的国家において宗教は「純然たる私事」として存続するという消

極的な意味において把握され、かつ他方で、その宗教の媒介的性格が民主的国家・政治的民主主義によってはじめて現実化・現世化するという積極的な意義において把握される。「ここ(キリスト教国家…筆者注)で支配している関係は、まだ信仰上の関係である。宗教的精神は、したがって、まだ現実的に現世化されてはいない。……宗教的精神が現実化されうるとすれば、それはただ……現世的な形式であらわれて確立されるば、いにかざられる。このことは民主的な国家でなされる。……政治的國家の成員は……市民社会的な生活と政治的生活とが、二元性をもっているために、宗教的である。……政治的民主主義はキリスト教的である」(Ibid. S. 360)。このマルクスの叙述から「回り道」が現実化し、現世的形式を持つのは近代においてであるという理解を読み取ることができる。すなわち、第二点においてマルクスは、宗教を内容と形態の両面から分析しているといえる。それまでは一体であった宗教における内容と形態という両契機が、政治的解放によって、一方では「國家から市民社会への宗教の移動」が遂行されることで「宗教は純然たる私事」(Ibid. S. 356)となり、同時に他方ではその宗教の持つ

「回り道」的性格・媒介的形式が自立化して、現実的かつ普遍的な構造として制度化されてくるのである。諸個人の「回り道」的あり方は決して近代に固有のものではなく、いわば歴史貫通的な内容を表現しているが、そのような「回り道」形式が自立化し、普遍的に構造化されるのは近代固有の事態なのである。

またマルクスはこのような「回り道」構造が、一様なものではないことに言及している。たとえば、マルクスは近代における国家を「媒介者」として規定するが、それが「観念的な独立態」(ideale Unabhängigkeit)という存在性格をもつことを指摘する。「それ(政治的革命……筆者注)はこの政治的精神をこの散逸状態からよせあつめ……それを共同体の領域として、すなわち市民社会のあの特殊な諸要素から観念的に独立している、(Zentraler Unabhängigkeit) 普遍的な人民的事項の領域として確立したのである」(ibid., S. 369)。ここでは「回り道」構造における媒介者・迂回点が観念的なもの・抽象物として把握されているといえよう。他方、マルクスは市民社会における神は貨幣であり、それが人間から独立に存立していることを述べている。「実際の欲望と

利己主義の神は、貨幣である。……貨幣はあらゆる物の普遍的な、自立的に構成された価値である。」(ibid., S. 374ff.)ここでは、国家における媒介者とは異なる存在性格として貨幣が把握されている。このように、「回り道」とは媒介項が自立的に存立することで生ずる構造を規定するものであり、かつその媒介者としての存在様式はイデアルなあり方と貨幣という物的なあり方とで区別されうること、をマルクスの叙述から読み取ることができよう。さらに、「回り道」ないし「迂回」構造における「抽象的な局限された様式」という叙述の意味が問題となる。なぜなら、迂回というとき、そこでは一方において迂回点、媒介物のあり方がそれ自体として問題とされると共に、他方では迂回する主体の側における迂回様式という問題も含意されているからである。回り道をするとき、その回り道のあり方によって回り道する諸個人も規定されてくるのである。そしてこの「回り道」構造を担う際の諸個人の固有のあり方、これを反省的に捉え返したものが「抽象的な様式」ということができよう。このことは、経済学批判においてより明確に把握され、マルクスの理論構想にとって重要な意義をもってくるの

であるが、その点についてはすでに筆者としては別稿で考察したので本稿では省略する。さしあたり、ここではこのような近代における媒介項の自立化という転倒への批判的見地が、後の経済学批判においても保持され、方法を背後から支える重要な前提となっている点だけを確認しておきたい。「そのものとしての富、すなわちブルジョアの富が、その最高のポテンツにおいて表現されるのは、常に、富が媒介者として、つまり使用価値と交換価値という両極を媒介するものとして定立される交換価値においてである。この媒介項はそれが対立物を総括するものであるがゆえに、常に完成された経済的關係として現象すると共に、結局のところ常に、両極それ自体に比べて、それよりも一面的に高いポテンツとして現象する。」(MEGA Abt. II Bd. I, S. 246)。初期マルクスが批判的に定式化した、媒介項の自立化という「回り道」構造の論理が、「経済的カテゴリーの批判」という課題の遂行に際しても不可欠の契機となっていることをここに見出すことができる。

第三節 抽象物の「回り道」的性格

初期マルクスの「回り道」構造把握は、経済学批判において再び重要な概念装置として取り上げられる。しかし、それは単純な再現ではなく、経済的カテゴリー固有の、関係の自立化とその物象化という、より複雑な事態の解明の方法的契機として、止揚された形で復活する。まず第一にマルクスの「回り道」論は、経済学批判の取組において思考物・カテゴリーの近代的形態が解明されることでより深化される。本節ではこの点を検討する。マルクスによって抽出された思考物・抽象物が媒介者として独特の迂回性格をもつ事態の問題性について、筆者はすでに別稿で検討しておいたが、その要点を摘記しておく。マルクスによれば、近代において関係の自立化という事態が普遍的な構造となることで、カテゴリー・思考物が諸個人から自立化し固有の媒介機能を果たすようになり、そして、かかる事態は諸個人においては「自己関係」という様式によって担われ実在化するものと、把握される。さしあたりこれらの点を再確認しておきたい。価値カテゴリーもこの観点から考察されるべきである。従来の価値実体論解釈の陥穽はこの点にあったといっても過言ではない。すなわち、「抽象的人間労働」とは

抽象活動によって把握される労働というカテゴリーであり、抽象作用と抽象物の存立は不可分であるから、抽象の所産に注目して規定するならば、それは労働という内容を表現するカテゴリーの抽象物それ自体としての属性を規定するものといえる。しかも、重要なことはそのような観念的カテゴリーが物象化して対象的な物に内属し、「対象化された労働」としてのみカテゴリー抽出が可能となり、他方ではそのことで対象的な物自身が「抽象的な対象性」(K. erste A., S. 17)となる点である。「抽象的な労働擬固体」(ibid., S. 20)とは、このようなカテゴリーと対象物とが一体化した事態を規定するものにほかならない。(次節参照)。抽象的人間労働というカテゴリーは物象化という特殊の事態ゆえに抽出されるのである。そして、そのような事態の出現する深奥の根柢は、本源的な質料代謝たる労働過程から社会的質料代謝が自立化する点にある。社会的質料代謝は形式的な質料転換であって、労働過程の産物、対象の形態における物だけが素材転換し、しかも、それは社会的諸関係の自立化と同時的過程である。こうして、対象的な物と一体化しつつ現実の労働過程そのものからそのカテゴリー表現が自

立化して、一方で質料代謝(労働)という超歴史的關係を表現しつつ、かつ自立的な社会的関係の媒介者として機能するのである。多岐的分業としての労働は抽象的人間労働という抽象を介して社会的機能を確証するのである。その際マルクスが、この抽象的人間労働を価値の「社会的実体」(K.H.S.S.)と把握したことが想起されねばならない。この実体というマルクスの与えた規定内容は、価値のカテゴリーとしての実体性であり、価値カテゴリーが諸個人から自立的に存立して諸個人を媒介する独自の機能を果たしている事態を指している。しかも、その「労働」というカテゴリーが物象化するがゆえに、カテゴリーの実体性は「対象化された労働」としてはじめて抽出される。このような意味で、「価値の実体は決して特殊の自然的実体ではなく、対象化された労働」(MEGA Abt. II Bd. I, S. 219)なのであり、物象化しているとはいえず、決して質料的な実体ではなく、自立化した共同的・社会的関係の実体性なのである。したがって、媒介者としてのカテゴリーの実体規定はそれ自身で関係規定を表現している。労働というカテゴリーの、諸個人を媒介するその社会的機能性を規定するものが、抽

象の人間労働なのである。同時に他方でこのカテゴリーは、労働という人間と自然の質料代謝関係を表現しているが、その表現内容自体はなら歴史的規定性を示すものではない。そのカテゴリーがもつ機能が歴史的なのである。このように、カテゴリーの表現内容とその形態性は区別されるが、同時にまたカテゴリーの持つ形態性はそれだけで孤立的に存在するのではなく、つねに一定の内容が素材として表現されているわけで、近代における労働というカテゴリーの機能性は、人間と自然の歴史貫通的關係を表現することと不可分なのである。このような理解を踏まえて初めて、「抽象的人間労働」が歴史的であると同時に歴史貫通的であるという二様の規定の統一的理解が可能となる。翻って、このような思考物の社会的実体化という事態を、関係しあう諸個人の立場からみるならば、思考物は諸個人から独立した媒介者として存立していることを意味しており、思考物は市民社会における関係の自立化の帰結として迂回的性格をもつに至ることが出来る。ここから「抽象的人間労働」の「回り道」的性格も導出される。マルクスは、価値抽象の「回り道」的性格についていう。「……織布と

の等置は裁縫を、事実上、両方の労働の内の現実に等しい物に、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。この回り道においては、その際、織布もまた、それが価値を織る限りでは、それを裁縫から区別する特徴をもつてはいないということ、つまり抽象的人間労働であるということが、言われているのである」(K. M. S. (9)。ここでは、価値抽象としての抽象的人間労働への還元が、リンネルと上衣という、物と物の内に隠されている自立した関係性の存在を、それ自体として確定するものであることが示されつつ、その価値抽象が「回り道」的性格をもつことが示されている。無意識的ではあれ、商品関係において諸個人がたえず自然発生的に行っているものとして、この価値抽象は社会的実体性をもっているのである。価値抽象とその抽象の所産である抽象的人間労働は、媒介物としてのカテゴリーの独特の機能を示しており、それゆえに「回り道」として把握されるのである。このようなカテゴリーの回り道的本質の把握は、前述した初期マルクスの「回り道」構理解と基本的に同一のものであるといえよう。ここでは媒介項が思考物・カテゴリーとして捉え返されているのである。

第四節 カテゴリーの物化と実体分析の方法的被

規定性

マルクスによって把握されたカテゴリーの「回り道」的性格(社会的実体性)は観念的な存在性格をもっており、したがって不可視である。しかも、それは表現内容に囚われることでその「形態内容」(K. erste A., S. 21)の独自性(機能性)を見過させやすい特有の困難をもっている。⁽¹⁰⁾しかし、経済的カテゴリーではさらにそれにとどまらない困難がある。すなわち、カテゴリーが物化することによって迂回の本質自体が物によって隠されるのである。⁽¹¹⁾ここに質料代謝を伴う経済的カテゴリー特有の事態があり、また、ここにこそ商品論において実体としてのカテゴリーの機能性を分析する意義と困難がある。すなわち、現実の資本家的生産様式においてはこのカテゴリーとしての媒介機能は貨幣という物において普遍的表現を獲得している。総ての商品が貨幣の一定量で表現されることから、その背後の「労働」という抽象物の存在は隠されてしまうのである。各商品は貨幣を媒介として貨幣の一定量に自己関係(一定量を自己内反映)するこ

とで自己の価値性格を現す。しかし、それは労働というカテゴリーの物象化した姿であり、媒介者としての貨幣をいくら分析してもそのカテゴリーの機能的実体性を抽出することはできない。貨幣を前提とすれば、カテゴリーは金の一定量としてのみ現象してくるのであり、その背後に隠されているカテゴリーの実体性は確定できないのである。したがって、ここから貨幣という物によって隠蔽されている労働というカテゴリーの機能性、社会的実体性をそれだけで純粹に確定する作業が必要となってくる。言い換えれば、物の存在の内に社会的媒介者たる観念的な思考物^{ゼダシヤ}を抽出することが、学問的課題として成立してくるのである。ここに価値実体の分析の固有の意義がある。それは物象化によって「隠されている価値」(K. I. S. 62)を追跡することにほかならない。単に関係が自立化しているにすぎない事態の場合には、その自立性は一定の思考物として言語において表現されるであり、カテゴリー・思考物の存在の確定という手続きをとる必要は全くない。思考物の実体性の確定というのは物象化という事態の解明に固有のかつ不可欠の課題なのである。この意味でマルクスの価値実体分析は、貨幣の存

在と商品の貨幣表現を前提としている。「商品の価値性の確定に導いたものは諸商品の共通な貨幣表現にはかならなかつた」(K. I. S. 90)。しかし、問題はカテゴリーが近代固有の機能的実体性をもっており、かつそれが物として表現されることで隠蔽されてくるという、この重層的構造をどのように分析し叙述していくかという点にある。そこでまず第一にカテゴリーの社会的実体性を確定し(価値実体論)、第二にそのカテゴリーが物として表現される構造自体を純粹に分析し(価値形態論)、第三にその物によるカテゴリーの実体性の表現が普遍性を獲得し、貨幣として固定されることが導き出されるのである(価値形態の第一、第二、第三、第四形態論⁽¹²⁾)。このような論理手順においてはじめて、貨幣の普遍的物象性(カテゴリーの物による表現の普遍性)とその背後に伏在するカテゴリーの機能的実体性を解明できるのである。物象化が表面的に理解され、自立化した関係の実体性が看過されるならば、マルクスがとらざるをえなかつたこのような分析手順の意義も決して明確にはならないであらう⁽¹³⁾。

ところで、このようなカテゴリーの「回り道」性とそ

の物的現象という事態の区別と関連は、二商品の等置式における両項の同一性と区別性をどのように論理的に把握するか、という問題と裏腹の関係にある。すなわち、二商品の等置関係は価値カテゴリーの機能的実体性の存在と、それが物として表現される形態の二つの側面を包蔵しており、前者の側面が価値実体として分析され、後者の側面が価値形態として分析される。前者では自立した関係の「回り道」性が確定されつつ両項の関係を担うものとしての同一性が、後者では「回り道」の物化した構造が分析されつつ両者の構造を担う際の役割上の違いが分析される。(後者は次節で詳論する。)資本家的生産様式の「構成要素」(K. erste A. S. 784)である個別的な等置関係(交換関係)が同一の分析対象であるが、その同一の等置関係が商品関係における関係の自立化と物象化という重層的転倒構造を解明するために、分析主題が実体分析と形態分析との二つに分化解せられるのである。そのような区別的分析が不可避なのは、上述のようなカテゴリーの物化という特有の事態によって分析者自身が方法上規定されるがためにほかならない。ここが決定的に重要である。マルクスの行った価値抽象はならんら恣意

的な方法ではなく、物象化構造ゆえに強いられた分析なのである。⁽¹⁴⁾物化によって関係の存立が物で隠され、同時にまた関係の担い手として物の受け取る規定性も隠されてしまう。そこから、関係の存立それ自身の確定と、その担い手としての物の規定を明確化することが固有の意義を持つのである。物と物の関係においては物が関係の担い手であり、外見上は単なる物を、その関係の担い手として規定することが重要な意義を持つのである。その際、関係それ自身の確定は、関係を担う側の素材的な特徴・具体的諸性状を捨象せざるをえない。物が関係の担い手であれば物の諸性状は捨象されるのである。つまり物を担い手として規定することはその物を捨象することと同一の事柄となる。抽出された関係それ自身は物によって担われるのだから、それはまた物の受け取る規定性でもある。こうして、関係それ自身の抽出と関係の担い手としての規定とは同一の分析であることが確認できる。この規定性は関係を担う限り、総ての担い手が同一に受け取る規定性と言うことができる。したがって、実体分析は一方で自立した関係の存在を抽出する事を課題としながら、他方でその関係の担い手として、諸物が受け取る

規定の同一性・構造の担い手としての同一性を確定する事を課題とすることが了解されよう。別言すれば、関係を構成する両項は、その関係構造の中で能動的、受動的というどのような役割を果たそうとも、一つの構造を共通に構成するものとして同一の規定性を共有せざるをえないのであり、両項に共通の規定性、同一性とはカテゴリーが自立して媒介機能をはたすところの構造としての規定性といふことができる。しかも、同一性は両項それ自身の固有の役回りとは区別される第三者としてのみ規定可能である。なぜなら、関係それ自体は関係し合う当事者と区別されて「孤立的」(K. I. S. 75)に把握されるのであり、関係を担う両項の構造上の固有性はその際捨象されるからである。このような価値抽象を踏まえて、自立化した関係の担い手として両項を規定し返したものが「価値物 (Wertding)」としての規定であり、同一の関係を担うものとしての性格規定が「価値性格」という規定である。等置関係での両項の同一性を規定することは、一方で関係それ自体を抽出し、他方では物を関係の単なる担い手として「孤立的」に規定することなのである。

第五節 「回り道」構造の物化

価値形態論では、カテゴリーの物による表現、すなわち「回り道」の物化した現象構造が固有に問題となる。ここでは二つの問題が同時に提示されている。第一の問題は、カテゴリーそれ自体だけでは現象は成立しないのであって、カテゴリーとカテゴリーが諸個人の意識において現象してくる独自の様式、及び両者の関連が解明されなければならぬ点である。その点については、本稿第二節で若干言及したほか主題的には別稿で検討したが、自立化した関係は、一方で思考物として存在すると共に、他方で関係の担い手においては「自己関係」という様式において現象する。言い換えれば、「回り道」構造は思考物と自己関係という二つの契機をもっており、思考物は自己関係という様式によって媒介され、実在化するものである。したがって、現象構造を主題化することは同時に思考物それ自身とそれに自己を関係づける契機との区別と関連を主題化することを意味している。「回り道」構造が構造の担い手に現象してくる様式、担い手が構造を担う様式、ないしは構造が担い手に媒介される様式は、

その存立している構造それ自体の「孤立的」規定とは区別される。構造が担い手に媒介される様式においては担い方が考慮され、担う項と担われる項との関係が同時に問題とされるのである。そこでは構造内における両極の差別的役割分担、構造を構成する項の各々固有性が問題となってくる。第二の問題は、関係が一般に思考物としてのみ表現されるものであるのに、物象化という事態のためにそれが物として表現される事態が生ずる点にある。ある物が、思考物を表現する他の物に、自己関係する点とで媒介されるのである。表現構造の内部、つまり担い手が関係を担うその時点で、担い手にカテゴリーそれ自身は決して現出しない。この物象化した構造の中では、カテゴリーの物象性とその物象性（一定量の物）に自己関係する担い手の物象性との相互関係だけが出現している。物の背後にあるカテゴリーの存在、及び自己関係の存在もそれぞれ物の独自の機能としてのみ現れてくるのである。自立化した関係構造の諸規定性を担う、物と物の相互関係だけが現象している。つまり、関係の自立化構造が、ここでは物化した構造として存在している。それゆえ思考物としての実体性は、前述のように等価物と

いう物としてのみ現象してくる。思考物たる「抽象的人間労働」それ自身の規定は、現象構造の中では不可能なのである。そこでは他の物の一定量として価格だけが現象してするのであり、価格規定は可能であるが思考物の機能的実体性を確定する価値規定は不可能なのである。

商品の価値表現は、以上のような二つの問題を同時に包含しているのである。価値形態論は、思考物の回りの道的本質の物による表現、物化したカテゴリーと物化した自己関係との相互関連の同時的分析としてのみ可能なのである。こうして、媒介物それ自身の極と、そこへと自己を関係づける極の相互前提的連関として把握された「回り道」構造は、さらに商品関係において物化して構造化されてくることで、一方で物が媒介項として迂回的性格を持つとともに、他方で別の物が自己関係の項を形成することになる。「回り道」構造が物象化することで、その両極が物として存在する事象、つまり「回り道」の物化した形態をマルクスは次のように述べる。「ある商品の、たとえば、リンネルの、現物形態は、その商品の価値形態の正反対物であるから、その商品は、ある別の現物形態を、ある別の商品の現物形態を、自己の価値形態にし

なければならぬ。その商品は、自己自身に対して直接にすることができないことを、直接に他の商品に対して、したがってまた回り道をして自己自身に対して、することができるのである。」(K. erste A. S. 20)。このことは、第三節で引用した「回り道」規定とは明らかに異なる意味づけが与えられている。カテゴリーを物的に表現する他の商品の現物形態を媒介として自己の価値性格を表現することをもって「回り道」とされているのである。カテゴリーの「回り道」的性格が物と物の関係において現象しており、かつ一方の物は他方の物に媒介されて自己の「価値性格」という関係の担い手としての本質を開示するのである。

ところで、前節で述べたように価値物としての規定は、関係の担い手として物を規定したものであった。関係それ自身の抽出を踏まえて、諸物は、そこから関係を担うものとして規定し返されるだけであって、諸物の間には何の区別も存在しない。価値物としての規定は同時かつ同一の規定でしかありえないのであった。しかし、現象構造の分析においては事情は異なる。ここにおいては上述のように各項が同一の構造を担いつつも、その構造

内の役割分担において対立的かつ相補的な異質の規定を受け取る。一方がカテゴリーそれ自身の存在を担うのに対して、他方は自己関係という役割を果たすのである。媒介機能を持つ思考物、すなわち「抽象的人間労働」は等価形態にある物において表現され、他方相対的価値形態におかれる物はその等価形態におかれた物の一定量を自己に關係させるのである。このとき、自己關係の極が主体的・能動的な役回りを果たし⁽¹⁷⁾、思考物それ自体を表現する極は客観的・受動的な項として各々役割分担をしつつ、価値の現象構造を全体として構成するのである。現象構造の分析に於いて初めて、両極の役割分担の区別が問題となりうるのである。したがって、關係の担い手としての両極の同一性、思考物の内属する物としての性格規定と、その思考物の物による表現構造における両極の役割の区別的性格規定とは、論理次元が異なり、それぞれ前者は実体分析、後者は形態分析に対応する⁽¹⁸⁾。論理次元のそのような差異化が不可避となる深奥の根拠は、前述のようなカテゴリーの自立化（実体化）とその物化という特殊な事態のために、カテゴリーの抽出とその表現が分離せざるをえない点にある。表現が独立化するの

である。単なる關係の表現としてはカテゴリーを抽出することと言語によるその表現とは一体的なものであり、区別する必要は全くない。ところが、ここではカテゴリーが透明な形で現象せず、物によって隠蔽されている。物の背後にあるカテゴリーの実体性は、この物自身を捨象する価値の実体分析によってのみなされうるものであり、他方この物が自立した關係の構造的諸契機として現れ出ている事態そのもの、物に物が媒介される構造、或いは物に物が自己關係する構造の分析は価値形態論においてはじめて果される。前者の分析は物の捨象によるのみ可能であり、後者の分析は物を捨象するならば不可能となるのである。思考物としての実体的機能性の側面を規定しようとするれば、思考物を抽出すると同時にその思考物の体化している物自身が抽象化され、他方、思考物が物として現象して行く構造を分析しようとすれば、思考物それ自身の自立的存在（実体規定）は捨象されざるをえないのである。ここに、カテゴリーの抽出（実体分析）とカテゴリーの表現（現象形態の分析）とが相対的に独立して遂行されねばならない根拠がある。このように、商品關係における物象化構造は、分析者をして二元

的叙述を不可避とさせるのである。(20) カテゴリーの物化によって必然的にもたらされるこのような二段性を明確化しないことから、後述するように「回り道」解釈においてどちらかに一元化する傾向が生じてくる。

ここで武田氏と久留間氏の論争に言及すれば、武田氏も久留間氏も一見対立しているようで同一の難点を共有している。(21) そもそも、久留間氏においては価値実体論と価値形態論の区別と関連をどう理解するか、という問題、つまり、両項の同一性(価値の実体規定)と区別性(価値形態の二規定)が論理的に把握されていない。そのため、論理的に別個の諸規定が同時に取り上げられ混在させられることで、マルクスにはない、リンネルが上衣に価値規定を与え、その上で上衣は価値体(等価物)になる(『貨幣論』[大月書店一九七九年]一〇四、一一五、一二五頁)。しかし、リンネルが能動的に立ち回る時、つまり相対的価値形態にある時、上衣の受け取る規定は等価物規定であり、そこでは両者の価値規定は既に前提とされている。他方、上衣に価値規定が与えられる過程は、論理的にも同時にリンネルに価値規定が与えられる過程であり、両

項の価値物としての規定は同一の過程である。ここではリンネルは能動的役回りにおいては規定されえない。久留間氏は、この両分析を区別できず、そのために両課題の混入した架空の問題を設定することになる。つまり、価値の実体規定の課題で同時に与えられる上衣の価値規定が切り離され、かつ他方で価値形態論で主題となる能動的規定がリンネルに与えられ、その上で後者の規定を付与されたリンネルが価値実体論でなされるべき価値規定を上衣に与えるという二重三重の誤りが重ねられ、架空の分析課題が作られるのである。価値規定がそれぞれの商品に与えられ、しかるのちに両項の区別的規定が与えられるというマルクスの分析の二段性、すなわち、価値の実体規定(両項の価値規定)と価値表現の区別的規定とが、それぞれ独立の一階梯をなすことを氏は予感しているものの純粹に区別して把握することができず、各々の分析課題に属しているものを他方の課題に混入させてしまい、その結果偽りの二段がまえの論理を構成するのである。武田氏はこれに対して、このような久留間氏の混乱した提起の前提そのものを基本的に継承して、その土俵のうえで批判を行う。氏はリンネルが上衣に価

値物としての規定を付与する過程は価値の顕現過程であり、上衣の等価物としての規定がなされる過程と全く同一である、したがって上衣の価値規定は価値表現の内部ではとりもなおさず価値体（等価物）としての規定である、そこには価値物としての規定から価値体、等価物への規定の転化は存在しない、と主張されるのである。

〔『価値形態と貨幣』梓出版一九八二年一九四頁〕 結論的にいえば、武田氏の久留間理論の二段がまえへの批判は架空の問題への批判であるが、同時に他方では、その上衣の価値規定と上衣の受動規定（等価物規定）の論理的同時性を主張することによって氏はマルクスの方法の二段性をも否定してしまっているのである。久留間理論の内に、混乱したままではあるが含意されていた価値規定と価値表現における等価物規定の区別、つまり「回り道」と価値表現における二重性が価値表現の等価物規定の側面にのみ還元されることになる。そもそも武田氏にあっては抽象物の「回り道」的本質が看過されており、そしてまたその「回り道」構造とそれが物として現象してくる事態の論理的差異性も把握されない。抽象物という機能的実体性の担い手としての屬性を物の屬性として規定する事

（価値物規定）と、その不可視の屬性が等価物という物の使用価値と一体化した規定として現象してくること（等価物規定）とは同一の事態ではあるが、論理上別々の側面であり、既述のように他方を捨象してのみ叙述可能なのである。したがって、両項の価値物規定から、等価物規定及び相対的価値形態の規定への論理的な二段がまえの進展はマルクスの叙述において不可避なのである。久留間氏の矛盾を突くあまり、武田氏はこの点を捨ててしまったといえる。このような武田氏の解釈方向が違うもうひとつ別の久留間理論の一元化の解釈方向がある。「価値として等置することにより、相異なる労働を人間労働として相互に等置することが『回り道』の論理だと解する」（下平尾勲氏『貨幣と信用』新評論一九七四年八九頁）。ここでは、抽象的人間労働・価値実体の迂回的性格がそれなりに把握されているが、物象化というこの問題性がなんら方法的に自覚されていず、抽象物が物として現象してくる「回り道」の物象的性格が看過されている。武田氏においては、逆に物象化した位相でのカテゴリーの表現だけが、つまり「回り道」の現象形態だけが、問題とされており、思考物・カテゴリーの

「回り道」の本質が看過されていると言えよう。これらの両傾向は、マルクスの「回り道」論のそれぞれ一面だけを取り出してにすぎない。価値表現における「回り道」は二重の転倒を孕むものであり、それが理論的に明確化されないことから、一方でそれは実体論、抽象的人間労働論に還元され、他方では表現論、価値形態論に還元されてしまうのである。

第六節 小括

「経済的カテゴリー批判」における「回り道」論の核心は「回り道」構造それ自体の問題性が、一方で思考物の迂回性格、つまり関係の自立化の帰結であるカテゴリーの近代的な形態性の把握へと理論的に深化されると共に、他方でその迂回性の物象化という事態の問題性の解明とが重ね合わされてくる点にある。つまり、「経済的カテゴリー」は初期マルクスの「回り道」論の水準では解かれえない固有の位相をもっているものであり、その批判的解明のためには「思考物」論と「物象化」論の把握を不可欠とするのである。それは「回り道」の物象化ともいべき事態であり、裏面からいえば初期マルクス

による「回り道」構造の批判的把握は、後期マルクスの方法の背後において保存され貫徹しているのである。こうして、価値表現の「回り道」構造は二重の転倒性において捉えられる。第一に思考物・抽象物は媒介者となることで独特の迂回性格をもつようになり、商品関係は価値抽象という「回り道」を経て遂行される。第二にその媒介者たる思考物は物象化することでその「回り道」構造は物として存在し、表現されてくる。すなわち、物が迂回性格をもつものとして現象してくる。この二重の転倒に即してマルクスが「回り道」規定をそれぞれ二様に使い分けていることは前節と第三節で引用したとおりであり、そのことは以上のような筆者の立論を裏付けるものである。従来「回り道」論を巡る諸議論は、出発点の一つとして久留間氏の解釈をもっていたが、久留間理論ではこのような「回り道」の二重性が明確に把握されず、「回り道」構造の諸契機が混在されていた。そのことがその後の論争の分岐に結果したと考えられる。そして根本的には、従来マルクス研究において、近代市民社会における関係の自立化の帰結たる思考物の形態的特質が把握されず、したがってまた物象化論が皮相に

理解されてきたことを指摘することができる。以上のよう
に、マルクスの「回り道」論は、経済的カテゴリーの
批判的把握において有効な方法的契機を構成していたが、
それにとどまらず、市民社会の機能様式を考察対象とす
る社会科学の方法論にとって、それはなお理論的展開の
可能性を秘めていると思われる。それを今後の課題とし
て稿を閉じることとしたい。

本稿でのマルクスからの引用は、*Marx, Engels Werke* →
MEW 等通常の略号を用いた。引用文中の強調点は、すべ
て筆者のものである。

- (1) 正木八郎氏「抽象的人間労働」『資本論を学ぶ』I—
二四頁、有斐閣（一九七七年）。
- (2) さしあたり、関根猪一郎氏「久留間皎造著『貨幣論』
の価値論論争における地位」『経済と経済学』東京都立大
学49・50号（一九八二年）を参照のこと。
- (3) 注(8)(10)(11)を参照のこと。
- (4) 拙稿「マルクス経済学批判的方法的前提について」『一
橋論叢』第91巻第2号一九八四年。「市民社会におけるカ
テゴリーの形態性」という問題を、別の視点からではある
が、知識の形態性の問題として論じるものに中西新太郎氏
「生活現実を学校知識におりあわせるといふこと」(『研究
紀要』第34巻鹿児島大一九八四年)がある。

(5) 媒介者は同時に総括者として捉えられる。Vgl. MEGA
Abt. II Bd. I, S. 246 そこから「市民社会の総括は国家と
いう形態で」(ibid, S. 281.) なされるといふ理解が導出
される。『ユダヤ人問題によせて』の国家論と後期マルク
スの国家論は「回り道」論によって接続しているといえよ
う。この点については既に平子友長氏が言及している。
〔マルクスの経済学批判の展開方法〕『経済理論学会年報
17集』九九〜一〇〇頁及び注(7)、一九八〇年度)

(6) 「抽象的な局限された様式」とは、筆者の理解では、
後に定式化される「自己関係」を意味していると思われる。
『ユダヤ人問題によせて』ではこの側面の主題的考察はな
されてはいないが、政治的国家的成員としては、それは
「自己意識的な活動」としての「政治的行為」として捉え
られている。「……非政治的な人間は必然的に自然的な人
間として現れる。人の権利は自然権として現れる。なぜな
ら、自己意識的活動 (selbstbewusste Tätigkeit) は政治的
な行為に集中するものだからである。利己的な人間は解消
された社会の受動的な、単なる既成結果であり、直接的確
信の対象であり、したがって自然的な対象である。」(MEW
Bd. I, S. 369) のようにマルクスは媒介項がイデア的な性
格を持つ場合は、諸個人は「自己意識的活動」という「抽
象的な様式」で「回り道」構造を担うことを示唆している。
詳しくは前掲拙稿参照。全体として本稿は前稿での議論を
前提としている。

(7) マルクスのカテゴリー論、自己関係概念については、前掲拙稿で略述した。なお、マルクスのカテゴリー論の哲学史的前提については、別に検討する予定である。

(8) 価値実体分析の意義を巡る諸見解の分立状況にもかかわらず、全論者が共通に、近代におけるカテゴリーの機能的実体性という問題性を明確にしてこなかったことを指摘できる。換言すれば、抽象的人間労働の規定に際してマルクスが残した二様の規定を整合的に把握する論理の抽出に成功してこなかったといえる。論争史的にはこの問題性はルービンにおいてはじめて自覚的に取り上げられた。「価値実体としてのこの抽象的人間労働を一方で社会的実体(『資本論』第一章第一節)……と呼び、他方では生理学的意味での人間労働力の支出(第二節)または生理学上の真理(第四節)と規定することによって、このカテゴリーが商品生産社会特有のものなのか、それとも歴史貫通的な超歴史のカテゴリーであるかという論点に関して二様の解釈、混乱の余地を残したことに對して……ともかくも両者を統一的に把握しようとする最初の体系的な試みとしてルービン理論を意味づけることができよう」(西口直次郎氏「マルクス価値論の発生論的方法」『経済学雑誌』第80巻第1号四頁一九七九年)。しかし、ルービン理論も本文で指摘したような労働カテゴリーの抽象物としての機能的意義を明確化しえなかった。また、ルービンの主張する内容↓形態・形態↓内容の方法論的問題についてはマルクスの指摘

する「形態内容 (Forminhalt)」(Kerstle A., S. 21) の理論的意義を明確化することが大前提とされるべきである。見田石介氏に閱していえば、抽象的人間労働概念がなにゆえに超歴史的内容を表現しつつ歴史的内容であるかその論理を明確に提出しえず、その結果両規定の二元論的並存という混乱に陥いつたといえる。(見田理論における実体・形態関係の二元論的性格を批判するものとして、中西新太郎氏「社会科学教育における『科学』の再把握」『一橋論叢』(第87巻第2号一九八二年)、同「唯物論的社會把握と生産分析」〔岩崎允胤編『科学の方法と社會認識』汐文社一九七九年所収論文)、平子友長氏前掲論文、が参照されるべきである。)氏においては市民社會における思考物の形態性の無理解があり、またそこから「抽象」についても皮相な解釈が施される。氏によれば、物の関係の内から社会的実体を析出したマルクスの価値抽象は、学問的分析のため事実を純化する単なる一手続き「予備工作」(『資本論の方法』弘文堂一九六三年一七頁)「人為的抽象」(『見田著作集第5巻』二三〜二四頁)としてしか把握されない。それは久留間氏においても同様である。久留間氏も「科学的認識のための不可欠な手続きとしての『捨象』の本来の意義」(『貨幣論』一五五〜一五七頁)という側面だけが一方的に主張される。武田氏との論争において、久留間氏は客観的抽象の意義を問題化しようとする武田氏の積極的意図を頭から否定されてしまっているのである。抽象の社会的意義に着目

しようとする限りで、武田氏の議論には妥当性があり、むしろその提起を受け止め積極的に説明されるべきであった。但し久留間氏に関していえば、氏は『資本論研究』（河出書房一九四八年）の座談会においては、単なる分析には還元されえない「客観的抽象」の独自の意義を認める発言をしていた。（九六頁）ところが、氏はそこで「客観的抽象」の意味内容を明確に提示はせず、その結果「客観的抽象」の指摘はその後、理論的に深化されず、むしろ抽象の超歴史的な認識論的一般化が一面的に強調される先のような主張がなされるに至るのである。その点で、ゾーン・レーデルが抽象の社会的意義を強調した点は注目される。しかし、二規定の統一的理解という論点は黙殺されており、またカテゴリーの近代的形態性と物象化の区別と関連、商品と貨幣の物象としての形態的差異、など核心点が把握されていない。その欠陥は彼のマルクス解釈が、独特のカント的構成によって基礎づけられ、マルクス研究としては外在的である点、ヘーゲルの反省規定の論理などが切り捨てられマルクス・ヘーゲル関係が否定されている点、に基づいているといえる。とはいえ、近代におけるカテゴリーの実体性という問題性を予感している点で彼の提起は重要である（『精神労働と肉体労働』水田洋・寺田光雄訳、合同出版一九七五年）。本稿では、筆者の主張を代表的な見解に対質させることに限定しており、言及できなかった諸論点については稿を改めたい。抽象的人間労働の量的規定性を示す勞

働時間の問題は時間カテゴリーの機能性ともいふべき問題を内包していると思われるが、それは今後の課題としたい。また価値法則との関連も今後の課題としたい。なお注(10)(11)(14)参照。

(9) ここでマルクスは抽象的人間労働という性格規定は両項に共通しており、また抽象的人間労働という価値抽象への還元は同時的であることを述べている。注(18)参照。

(10) 表現内容に囚われた形態内容の看過という問題は宇野氏の理論に典型的に現れている。宇野氏においては、労働というカテゴリーの、思考物としての屬性における機能的意義と、資本に包摂された現実の労働過程自身もつ価値増殖における素材的意義とが同一視される。氏は「社会的抽象」の独自の意義に一応着目はするが、やはり久留間・見田氏同様に、思考物の社会的な実体性を決して把握せず、その結果、労働というカテゴリーの表現内容に囚われ、そのカテゴリーの持つ形態性を見落とすことになった。そして、その独自のマルクス解釈に基づいて、氏はマルクスによる価値実体の析出を恣意的なものとして批判するのである（『資本論研究』前出九二頁『宇野著作集第九巻経済学方法論』一五七頁以降）。ところが、マルクスの行った価値抽象・実体分析は、商品関係において日々行われている無意識的抽象を自覚的に定立したものであり、現実の交換関係においてなされている抽象の実体的な機能性を抽出するものであり、現実と即応する分析にはかならない。

(11) マルクスの物象化論についての筆者の見解は前掲拙稿(第四節)で略述しており、本稿はそれを踏まえている。ここでマルクスの実体分析は暫定的指定であると解釈される広松氏の見解について、簡単に検討しておきたい。氏の主張は、従来の「抽象的人間労働」を巡る二元論的解釈への批判の試みとしてそれ自体は評価されるべきであり、また新カント派の価値概念とマルクス価値論との関連についての指摘も検討されるべき問題を含んでいるといえる(『資本論の哲学』現代評論社一九七四年、一七七頁)。が、そのような社会存在論―認識論の問題を考察する大前提でもある、マルクス価値論それ自身の内在的理解という点で、筆者としては氏のマルクス解釈に首肯しがたい問題を感じます。まず、氏が、「実体」という規定のもとに何を了解させているのか、ということが問題となる。周知のように、マルクスには、「二つの実体」論ともいふべき問題把握が、経済学批判体系の方法論的前提としてある。たとえば、「価値の実体は決して特殊の自然的実体ではない……」(MEGA Abt. II Bd. IS. 219)「あらゆる商品の共同的な実体、すなわち、その質料的な素材、したがって、物的な規定としての実体ではなく、諸商品とそれゆえ諸交換価値としての共同的な実体……」(Ibid. S. 196)。ところが、氏においては、このようなマルクス実体論の重層性が顧慮されていないように思われる。所述のようにマルクスの価値実体規定は、近代市民社会において関係そのものが自立

化することで実体的な意義をもってくるという特殊の事態を規定したものにほかならない。それゆえにこそ「社会的実体」として自然的実体との区別の含意された規定をマルクスは与えているのである。したがって、広松氏の実体規定の解釈における問題点は、第一に、価値形態論に媒介されることで抽象的人間労働規定は最終的・究極的に社会的・歴史的规定として再指定されるという主張されることから、冒頭の実体規定そのものにおいて社会的形態性がどのように規定されるのかという論点が回避され「社会的実体性」の「社会的」の意味内容が、かの「生理学的云々」の歴史貫通的規定とどのように統一的に解されるのかその論理は、冒頭の実体規定自体では解明不能とされる点にある。そして、実体規定は暫定的であり、比喩的表現にすぎないと主張されることで氏においてはむしろ、マルクスの与えたその「社会的」規定性の持つ問題性が看過されることになるといえる。第二に、氏においては関係の自立化と物象化の区別と関連が明確に捉えられてはいない。その結果、カテゴリーが物象化しているがゆえにカテゴリーの実体的性格を規定せざるをえないという、実体分析の必要とされた事情が等閑視され、逆にその実体的性格そのものが物象化的表現であるとみなされる。しかし、マルクスの行った価値の実体規定とは、物の背後に隠されている自立的關係の実体性を確定するものにほかならず、その社会的実体的性格が物で表現されるという物象化的表現を巡る諸規

定は価値形態論で初めて主題化されるのである。氏においては関係の自立化そのものもつ固有の転倒性が擱まらず、関係を自存視することが直ちに物象化であると同視され、そのことで経済的カテゴリーにおける関係の自立化の隠蔽という、物象化構造の再転倒的性格の独自の問題性もまた把握されないことになる。氏は関係論的視角を強調するにもかかわらず、近代市民社会固有の関係性を明確には規定しえないのである。その他「四肢の構造」論などの理解が提起されているが「虚心坦懐にまずはマルクスの行文を理解していこう」(『資本論解釈の齟齬』『現代の眼』一九七五年八月号二八九頁)とするのであれば、自己独特の哲学的術語によってマルクス解釈を基礎づけることには疑問が残ると言わざるをえない。

(12) この論点は、本稿では略さざるをえない。

(13) 本節では実体論に限って方法上の被規定性の問題を述べた。第五節では実体論と形態論への二元的叙述が不可避となる事情について検討しており、合せて参照されたい。

(14) 実体分析の方法的被規定性と物象化論的観点との不可分性については、従来の研究においてほとんど解明されてこなかった。たとえば、見田氏は、物象化の背後にあるカテゴリーそれ自身の実体性を抽出する分析の市民社会的規定性を全く理解せず、第一に、表現内容に囚われることでマルクスの実体規定を超歴史的な労働に解消し(『資本論の方法』前出八四頁)、第二にそこから類概念をはじめに

明らかにして分析を進めるのは、自然科学を含めた総ての科学に共通であることより積極的に主張する。見田氏の宇野批判のポイントの一つもここにあり、宇野氏がこのような分析における類概念の意義を否定するがゆえに誤りとさるのである。「類概念を見出し、それから翻って与えられた対象をみること」「与えられた生産関係を、あらゆる社会に共通する生産関係一般から上昇して捉えること」がマルクスの方法であり、「マルクスはそこで(『資本論』で)商品をつたえただけの使用価値にまで分析し、価値を抽象的労働にまで分析し……それらの永遠の自然的な条件から、それぞれ歴史的な商品、価値、……にまで上昇しているのは誰の目にも明らかなことである。」(『見田石介著作集』第5巻四九〇頁)と解釈されるのである。そしてまさにこの抽象的人間労働を超歴史的な類概念とみなす点で、それをカテゴリーの形態的実体性とは認めない点で、両者は共通している。宇野氏は、類概念だから資本家的生産様式分析の端緒で叙述されるべきではないとされる。それに対して見田氏は実体規定の無理解を補うために、価値実体分析の意義を不当に科学一般の方法へと拡張する外在的な議論を持ち出し、諸科学はマルクスにならって非歴史的な類概念の確定↓現象形態の分析へと進むべきであると主張されるのである。そこでは、マルクスの価値実体分析の方法的規定性が完全に閑却され、さらには錯認されたマルクスの方法が全能の普遍的方法に神化されている。宇野学派に関し

ていえば、二重の混乱がある。第一に関係としての実体性を労働過程へ還元する点(注(10)参照)、第二にその誤認された実体規定が生産過程で論証されるべきと主張される点、である。しかし、物の背後からカテゴリーの機能的実体性を抽出することは物象化批判にとって不可欠の課題であると共に、関係が自立化するのみならず商品関係においてであり、そこにおいてのみカテゴリーの実体性を確定できる。資本においてはカテゴリーは物化しつつ自己運動として過程的にのみ存在しており、実体としてはけっして固定的に規定することはできない。思考物が主体として存在しているわけで、主体としての固有の規定性は、実体としての規定を前提としてそれとの違いを明確化することを通して初めて規定されうる。このような理由から実体分析は商品関係の部面においてこそ可能なのである。この論点は資本の物象性の説明を必要とするが本稿では略さざるをえず、さしあたり以上の点だけを指摘しておきたい。しかし、宇野理論のいわゆる単純商品社会論への批判的意図と『資本論』の論理的に一元的な解釈めざす試みそれ自身は評価されるべきではないかと筆者は考える。マルクスにおける論理(構造)と歴史の問題は別稿で検討したい。

(15) 両項とは区別された関係それ自体・第三のものには思考によってのみ把握される。(この点の理解は前掲拙稿で検討したマルクスの関係論を踏まえている。参照されたい)。そして、現実にはその第三者・関係それ自体を表現するカ

テゴリーは物として表現されており(普遍的には貨幣表現として)物象化してのみ現象している。したがってその物象的表現を所与のものとしつつ、カテゴリーの機能的実体性を確定するためにその物象としての側面を捨象する分析がなされるのである。しかも、等置関係それ自体の抽象は思考物への還元(抽象)としてのみ可能であるから、商品関係の孤立的分析とは、価値抽象の確定に帰結するのである。したがって、両極の同一性―第三者の抽出―価値抽象―価値還元―関係それ自体の確定―関係の担い手としての物の規定とは同一の分析を指している。

(16) 前掲拙稿参照。

(17) 宇野氏が相対的価値形態の能動性を強調してきた点は重要であるが、その能動性を直ちに商品所有者の欲望として解釈したことは多大な混乱を招いたといえる。根本的には、関係の自立化構造の内における能動性は、自己関係というありかたでのみ存在しうるということが明確化されねばならず、また物の人格化と人格の物化という規定の概念的把握及び人格概念の把握を不可欠とする。後者の論点については別の機会に譲らざるをえない。

(18) 久留間氏における理論的混乱の一つはここにあった。氏は現象構造における両項の役割上の区別をもって両項の価値物としての規定性の論理的先後関係の論拠としたのである。しかし、本文及び注(9)で述べたように価値物としての両項の規定性は論理的にも同一かつ同時の規定なの

であり、しかもそれは現象形態（兩項の質的差異性）を捨象したところに成り立つ実体分析としての規定であり、そのカテゴリーとしての実体性が表現される現象形態における兩項の区別的規定とは論理次元が異なる。現象形態における兩極の区別の際には既に自立化したカテゴリーの担い手としての質的同一性は前提とされており、そのうえでそのカテゴリーの表現構造が問題とされるのである。

(19) 「すなわち独立な表現が与えられる」(K. I. S. 64)。

Vgl. K. I. S. 75

(20) この点は資本の物象性の理解と深くかわるが、紙幅上略さざるをえない。

(21) 久留間理論に対する武田氏の主張のメリットは、抽象

の意義に着目しその方法的徹底化を主張する点、等置式が二重の側面をもっていることの指摘に在ると思われる。

(武田信照氏『価値形態と貨幣』梓出版一九八二年) しかし氏は抽象の持つ社会的意義をカテゴリーの実体性の問題としては把握しておらず、また物化の問題や実体分析と形態分析の論理的関連に論及していない。それがまた久留間批判の一面化をもたらしめていると思われる。

(22) この二段がまえに正木八郎氏は注目する。「マルクス価値形態論の論理構造について」『経済学雑誌』第83巻第6号一九八三年) が、紙幅の制限上、稿を改めざるをえない。

(一橋大学大学院博士課程)